



# 都会の選挙と田舎の選挙 変容するケニアの遊牧民集落

二〇〇七年二月二十七日におこなわれたケニアの総選挙では、選挙後に発生した暴動により、多数の死者や国内避難民を出す事態となった。

今回の総選挙では、大統領選候補者の民族的な帰属が政治的争点になっていた。選挙直前の首都・ナイロビは、連日の大小の政治集会、デモ行進、街宣カーなどで騒然としていた。

## ●差入れに励む候補者たち

一月二十日、わたしはナイロビ市の選挙運動から逃げるように、ケニア北部の乾燥地で生活する遊牧民アリアールの集落での調査を再開した。この集落は、ガソリンが入手可なな町から一〇〇キロメートル以上離れた遠隔地に位置しており、人びとはラクタとウシの乳に依存した生活を営んでいる。

集落に着いた夜のことだ。搾乳を終えた家畜のため息が聞こえる暗闇のなか、人びとと再会を喜び合っていると、風に乗って場違いなポップ音楽が聞こえてくる。

「ここに車で来る人間なんて私ぐらいのはずだが?」と思いながら、音のする方向を見ると、遠くに車の灯火が光っていた。しばらくすると賑やかな音楽を大音量で流すトラック

が到着した。大統領選と同時にこなわれる、この地域の国会議員選の候補者が、乾期の水不足に悩む遊牧民に水を差し入れにきたのだ。

水ために注がれる水、灯火の輝き、音楽、タバコやビールの差し入れ、「お祭り」のような盛り上がりは深夜まで続いた。しかしトラックが去った後、集落の人びとは醒めたように、「これっぽっちの水が何になるって言うんだ!?!」と言いながら、早々に眠りについていた。

このような砂漠の街宣カーは昼夜を問わず遊牧民の集落をまわり、ナイロビ市さながらの選挙運動をおこなっていた。それは、田舎町のガソリンを使い尽くすほどだった。選挙運動員は人びとの歓心を買うべく、水や食料、お金などの「差入れ」を提供していた。

## ●国家の外側から内側へ

つい最近まで、この地域の人びとは選挙に関心をもっていなかった。そのため「差入れ」の量で選挙の趨勢が決まるようなところがあったという。なぜなら、選挙人登録すらされていない人びとが多かったし、たとえ投票しても、選ばれた国会議員や大統領が地域のために何かしてく

れることは、選挙時の「差入れ」を除けば無かったからである。言い換えればケニア北部の遊牧民は「国家の外側」に位置づけられてきた。

しかし近年のケニアでは、こうした「国家の外側」に対しても、地域の国会議員を介して、インフラや行政サービスが提供されるようになってきた。たとえば集落付近では、地域住民が国会議員に陳情することで、年中涸れない深井戸が掘削されたり、学校や診療所などが建設されたりしている。

こうした変化を目の当たりにした人びとは「誰が『私たちの声』を聞いてくれるのか」といった観点から投票をおこなうようになってきている。もはや選挙は「お祭り」ではない。政治に参加し、国家と交渉しながら自分たちの生活を守り、変えていくための手段なのである。



国会議員選挙の運動員による集落の貯水槽への給水(2007年)



原野に設置された投票所で投票する女性たち(2002年)



ないとう なおき  
内藤 直樹  
民博 機関研究員  
専門は生態人類学、地域研究。東アフリカ牧畜社会の制度・組織の可変性・流動性、貧困と開発、紛争・難民問題などに関心がある。著書に『遊牧民』(昭和堂、二〇〇三年)などがある。